

Title	価値学説無用論と限界効用理論
Sub Title	
Author	気賀, 健三
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1931
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.25, No.9 (1931. 9) ,p.1375(125)- 1412(162)
JaLC DOI	10.14991/001.19310901-0125
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19310901-0125">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19310901-0125</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

第二十五卷 (一三七四) ジョン・エリオット・ケアンズの經濟學方法論

第九號 一二四

(註七九) J. K. Ingram History of Political Economy. p. 151, 152.

(註八〇) Cairnes "Character" p. 76.

(註八一) 國富論、氣賀勘重譯第一篇第一、二、三章

以上

(一九三一・八・二一日)

## 價值學說無用論と限界效用理論

氣賀健三

一  
價值に關する理論は、經濟學說史上に於て、古より論争の絶えしこと無く、今日に至る迄依然として定説の存在し得ない最も紛争多き問題の一つである。此問題に關して當今最も勢力のある學説は、英國の古典學派に源を發する客觀的價值學說と、一八七〇年以來主として奧太利の諸學者の努力に依つて全世界に急激に傳播せる、所謂奧太利學派の主觀的價值學說とである。此二つの學派と雖も夫れ／＼に全然其説を同じうする論者より成立つて居るのでは無く、同じ奧太利學派に屬する人々の間に在つても詳細なる點に就ては互に其所論を異にして居るのである。加ふるに此兩學派の論争は、各互に自説を枉げること欲せず、唯相手を屈服せしめんとするに急なるの餘り、益々其論議を紛糾せしめ、價值の概念を明瞭ならしむるよりも、寧ろ之が理解を困難ならしめたかの觀があつて、各學者がそれ／＼の立場よりせる價值學說に關する文獻は實に枚擧に遑なき程である。殊に奧太利學派の人々が價值の説明に人間の欲望の心理學的分析を試みたことは幾多の人々をして

價值の概念の理解を益、困難ならしめた傾があるのである。

現時の經濟學界に於いて一つの風潮を爲せる價值學說無用の論は、實に斯様な狀勢から反動的に生じたものに外ならぬ。果てしなき價值學說の論争が問題其物の解明よりも寧ろ紛糾を齎らす上に與つて力ありとすれば、斯る曖昧なる概念の助を藉ら無いで經濟上の諸問題を説明しようとする試みの生じ來たるのも亦當然の勢であらう。即ちゴットル(註二)、リーフマン(註三)、ディーツェル(註三)、カッセル(註四)、バレート(註五)、等は斯様な試みを敢てした人々の、中の主要な人達である。

註一 S. Gottl-Ottilienfeld; Der Wertgedanke, ein veraltetes Dogma der Nationalökonomie, 1897. Die wirtschaftliche Dimension. Eine Abrechnung mit der sterbenden Wertlehre, 1923, etc.

註二 S. R. Liepmann; Gundsätze der Volkswirtschaftslehre, Bd. 1, 1917.

註三 S. H. Dietzel; Vom Lehrwert der Wertlehre und vom Grundfehler der Marxschen Verteilungslehre, 1921.

註四 S. G. Cassel; Theoretische Sozialökonomie, 1923. 3 Aufl.

註五 S. V. Parto; Manuel d'économie politiques, Tra. s. Iatiene, II edit, 1927.

價值學說を無用とせる此等の論者は、必ずしも其所論を同じふするものでは無く、各、其立場を異にするに連れて、其立論の趣好も亦、それぞれの特色を示して居る。例へばゴットルは「價值なる語の有する種々雑多な意義を擧げて、以て價值の理論を排斥し、別に wirtschaftliche Dimensionなる一つの概念に依つて價值並に價格の概念に代用せんとして居るし(註六)、又リーフマンは、價值論を排斥して、其代りに、個々の經濟主體の心理的考慮作用を根據とせる一つの價格論を立て、居る。而してリーフマンに據ればあらゆる經濟行爲の方針を定めるものは、財貨の價值では無く、當

該財貨に要する費用と之より享くる満足との差額の大小如何であつて、物の價格を定むるものは、此費用と満足との差額即ち純収益であるのである(註七)。

註六 S. Gottl; Die wirtschaftliche Dimension. Eine Abrechnung mit der sterbenden Wertlehre, 1923.

註七 Vgl. K. Dichtl; Theoretische Nationalökonomie III Bd. S. 116.

瑞典の碩學カッセルは從來の價值論が全然無用であり、經濟學の説明は價格論のみを以て足ることを力説して居る。否な、其説に據れば經濟學は價格形式論なりとさへ斷言して居るのである(註八)。

註八 三田學會雜誌第二十五卷第四號、拙稿「カッセルの價格論と自由競争論」参照。

更に又、バレートは經濟的平衡の理論の立場から價值なる用語が、不明確なると同時に不要なることを主張して居る(註九)。

註九 S. Handwörterbuch der Staatswissenschaften, (爾後 HWB と略す) 8 Bd. S. 1031, S. 1014.

此等の諸學者が價值論の無用を説く反面に於て、別箇の價格理論を提唱して居ることは確であるが、其立場は如上の説明に依つて明な如く、それらに相違して居る。併しながら、一面から觀れば、此等の積極的な新しい價格理論の樹立は、何れも在來の價值論に對する不満から生じたものに外ならず、而して其不満は必ず從來の價值論に對する批判の形を取つて表はれて居る。蓋し、在來の價值論に何等の缺點を見ないならば、價值學說無用の議論の生ずべき餘地は全然無い筈であるからである。

今翻つて、斯る消極的な價值學說無用論の根據、特に所謂の塊太利學派の限界價值の理論に對

する其態度を観るに、吾人は諸論者の間に幾多の相共通せる所論の存することを窺ひ知るのである。

本論文の目的は價值學說無用論を代表する一人としてグスタフ・カッセルを捉へ來たり、其價格理論が積極的方面に於て果して價值論なくして完全に説明せられ得るや否やを研究すると同時に、消極的方面に於ける、限界價值の理論に對する其批判と該理論無用論の論據とをば、爾餘の限界價值理論の批判者の意見と比較しつゝ、検討せんとするものである。

此に主題として特にカッセルの學說を持ち來つたのは、氏の學說がレオン・ワルラス、及びヴィルフレド・パレート一の系統を引いて居る所の、價格平衡論の立場よりせる價值學說無用論であつて、一般に最も普遍的なる無用論と認められて居るが故である(註一〇)。現時、獨逸に於ける最も著名なる經濟學理論家の一人、ハインリッヒ・デイトツェルが『余はカッセルの意見に全く賛同するものである』と言ひ『余は次に……、唯單に、尙ほ論ずべき餘地の數多残れる生産論のみならず、更に分配論も亦價值概念を迴避して爲さるゝものであることを示さんとする』(註一一)と述べて居ることも亦カッセルの說の尊敬すべきものなることを裏書するものであらう。

註一〇 S. HWB. VIII Bd. S. 1013.

註一一 Dietzel; Vom Lehrwert der Wertlehre und vom Grundfehler der Marxschen Verteilungslehre. S. 3, S. 4.

それから、價值學說無用論と關聯せしむる目的を以て、此に限界效用學派の價值論を持ち出して來た理由は外でもない、該派の學說が現今に於て最も勢力ある理論の一つを代表するものとして、

之に對する賛否の論頗る喧しく、其論争は、該學派の煩鎖なる價值の説明と相俟つて、價值學說無用論を生むに至つた一つの有力なる原因と考へらるゝからである。然れば茲に、限界效用學派に對する論難の二、三を明にすることは、該學派の爲にも又價值概念の明晰の爲にも決して無用の業では無いであらう。

## 二

先づ此に本文の最初に於て、カッセルが如何なる論據に立つて、價值論なき價格論を説明するかを明にして見やう。

カッセルに依れば、人間は、それ〴〵獨立の經濟主體として、自利心に驅られて經濟的行爲を爲す。彼の所謂の交換經濟社會とは斯くの如き經濟主體の單なる集合體を指すものである。此社會は先づ第一に拂底の原則(又は稀少の原則……Princip von Knappheit)に依つて支配されて居る、即ち吾々の交換經濟社會に於てあらゆる經濟財は、吾々の欲望に比して稀少である。換言すれば吾々の欲望は、必然的に、財貨の存在量の拂底といふ事實に依つて一定の程度に制限せられねばならぬのである。交換經濟社會を支配する第二の原則として、カッセルは欲望満足均等の原則を擧げる。之は交換經濟社會内に於ける吾々の經濟的行爲の準則であつて、他の事情にして等しき限り、吾々は單に財貨に對し單に其有用性の大小のみに従つて欲望を満足せしめんと行動するもので無く、當該財貨の限界效用に就てそれが消費せんとする爾餘各種の財貨のそれと均等と爲る様に行動すべきであり、又當然左様に行動するものであることを意味して居る。此外に更に一つの原則が附加へられ

る。最少手段の原則が即ちそれで、此原則は或一定の經濟的目的を達する爲に可及的最少の費用を投入して以て爲すべきことを吾々に要求するといふのである。

カッセルの經濟理論は斯様な三つの原則の支配を前提とする交換經濟社會に於ける經濟現象を對象とする。而して氏の說に據れば經濟學は畢竟價格形成論に外ならぬのであるから、價格は結局斯様な原則の支配の下に形成されるものでなければならぬのである。

併しながら單に是丈の前提を以てしては、吾人は價值學說なき價格論の特長を見ることは出来ぬ。蓋し斯様な前提は限界效用學派の用ふる前提と何等相違あること無く、従つて又カッセルが在來の價值論に對する非難の根據を此に見ることは出来ぬからである。カッセルも亦、固より單に斯る前提のみを以て價格論に飛躍せんとするものではない。氏は價值學說を排斥する爲に、別に氏獨特の前提を設ける必要に迫られて居る。限界效用學派が、上記のカッセルの前提に類する假定より出發して、直に各經濟主體の「價值評定」(Wertschätzung)を説くに對し、カッセルは或一定の貨幣額の概念を以て之に置き代へんとするのである。曰く「人は交換を行ふや否や交換せらるゝ、兩財貨が、其幾何を取引せらるゝやを判断せんとする必要に逢着する。換言すれば、此際兩財貨の評價が行はれねばならぬ。此評價は、若し人が唯一つの同一の財貨に依つて一切の財貨を評價するを常とするなれば、明に頗る簡單と爲るのである。尙ほ又、吾人は此慣習が、交換の慣習其物と殆ど全く同時に完成せることを知つて居る……」(註一三)。此にカッセルが貨幣のことを論じて居るのであることは謂ふまでもない。斯る貨幣の「第一の根本的職分は、實に、交換せらるゝ財貨の評價をし

て可能ならしむる所の計算尺度の基礎をして利用せらるゝことである。」(註一三)現實の交換經濟は必然的に一般的交換手段として何等かの貨幣の存在を豫定するものである。

カッセルは斯くの如く貨幣が存在しなければ交換經濟社會を想像することが出来ぬといふ實際上の必要と現實の歴史に於て、交換の慣習のある所には必ず貨幣を使用する慣習があつたといふ事實とを論據として、次の様な假定を設ける。「交換經濟一般に關する以下の理論的研究に於て、吾々は一切の經濟的評價に對する共通の計算尺度としての職分を帯ぶるものとして貨幣を觀察する……」

『貨幣が計算の尺度として利用さるゝや、交換行爲は賣買行爲に轉ずる。賣手は財貨を與へ買手は之に對して一定の貨幣額を支拂ふ義務を負ふ。一財貨に對して支拂はるゝ貨幣額を人は其價格と呼ぶ。』(註一四)

註一三 Cassel; Theoretische Sozialökonomie, S. 39.

註一四 Cassel; a. a. O. S. 39.

カッセルは斯る假定の上に立つて價值學說なき價格論を説明し得ると信じて居る。即ち氏に據れば貨幣に依る財貨の評價は交換經濟の反面であり、交換經濟の發達は必然的に貨幣の發達と相伴ふものなのである。事實上の貨幣の存在の必要と、歴史上に於ける貨幣の交換との相關關係は氏をして價值論排斥の根據たらしむるものである。即ち、氏は在來の價值論に就て述べて曰く「貨幣經濟以前に、之よりも早朝にして且つ簡單なる經濟形式として「純粹なる交換經濟」があつたといふ考は

經濟學の爲に不幸なことであつた。即ち、斯る考へのあつたが爲に、經濟理論は貨幣なき假想的交換經濟の現象を取扱ひ、其研究を全理論體系の基礎とせざるを得なかつた次第は明瞭である。此努力は經濟理論を測り知れざる困難に卷込み、全く無益な限り無き論争を生むに至つたのである。世人は、財貨の交換を制規する諸要素をば貨幣を除いて研究するを必要と考へたが故に、價格、即ち、經濟を營む所の各人の財貨に對する評價を貨幣に依つて表はせるものを、研究の對象と爲すことが出来なかつたのである。……其處で斯様な表現の代りに人は「價值」といふ甚だ不確定且つ曖昧な概念を入換へたのである。」(註一五)

カッセルの以上の推論は、單なる事實の上に立つた推論に外ならぬ。交換經濟社會は必ず貨幣の發達を伴ふて居るといふ歴史的事實は、決して價值學說を排斥するの論據とは爲ることは出来ぬ。此歴史的事實とカッセルの此結論との間には何等の論理的必然性も證明されて居らぬ。交換經濟は其反面に於て貨幣經濟であるといふ事實は唯、そのみを以てして價值學說なき價值論を正當視する理由とすることは出来ぬ。價值學說を無用なりとするには、其處に何等かの論理上の理由が存在せねばならぬ。事實の敘述は決して科學的説明と爲り得るものではない。

従つて、カッセルも亦單なる事實の論據に満足せず、價值論の缺點を指摘して次の如く述べて居る。第一に價值なる概念は頗る曖昧であつて、數學的に表現し得らるゝ量的概念の如き正確さを缺いて居る。之が爲に主觀的價值論者は財貨の相對的な經濟上の重要性を示すに人間の欲望の強度を以てし、之に數量的大さを與へるといふ虚構を爲すに至つたのである。更に第二に斯説は貨幣を無

視する。貨幣を考へぬことは人間の欲望を比較する爲の共通の尺度を失ふことであつて、之が爲に、主觀的價值の理論は一般に科學的理論に附隨すべき内容の正確さを失はねばならぬ爲り、又同時に該理論の根本的誤謬の存する所を明示するに至つたのである。(註一六)

註一六 Cassel: a. a. O. Ss. 40-41.

上記の所言よりして、經濟學に取つて特殊の價值論が全然無用であることが推論せられる。「價值判斷に對する共通の稱呼無しに價值論を打ち樹てる試みは何れも皆大な困難に衝突せねばならぬ。一度び斯様な共通の稱呼が採り入れらるるや否や、人は第一に貨幣を要求する。其處で價值は價格に依り、價值評價は貨幣に於ける評價に依つて置換へられ、茲に價值論の代りに價格論が存在することに爲る。吾人は須らく此事情よりして一つの斷案を下さねばならぬ、經濟學より所謂る價值論なるものを全然排除せねばならぬといふことが即ちそれである。交換經濟の理論的説明は最初より貨幣を觀察せねばならず、従つて其説明は又同時に本質的に價格形成の理論と爲らねばならぬ」(註一七) 斯くして經濟學は現在それが屢、陥つて居る所の最も厄介なる詭辯的議論より救ひ出さるゝのである。

註一七 Cassel: a. a. O. Ss. 41-42.

今暫く、カッセルの所論の是非を措くとするも、果して然らば貨幣の價值は如何にして説明すべきやが、此に當然一つの問題とならねばならぬ。カッセルは此問題に對して直に答へることを避ける。曰く「貨幣は既に示せる如く、茲では第一に單に計算尺度として觀察せらる可きである。……」

吾々は單に一切の價值評價を可能ならしむる所の一つの計算尺度を要求するのみである。……吾々は或る實質的な貨幣の存在より暫時眼を他に轉ずるものである。計算尺度其自體が如何にして定めらるゝや、即ち其價格が其絶對的高度に従つて如何に定めらるゝやの問題は之を放置して、貨幣に關する特殊理論に俟たねばならぬ』と(註一八)。

註一八 Cassel: a. a. O. S. 49.

カッセルに據れば此貨幣經濟に關する前提は決して人爲的に考案された繙譯策では無くて經濟學の本質に存するものなのであるが、然も氏は、論理的に之を證明して居らぬ。唯、單に事實上の必要と歴史上の事實とを擧げて之を斷言して居るに止まるのである。併し吾々人類の經濟生活の歴史を顧みて交換經濟は果して常に貨幣經濟であるか、或は貨幣經濟は交換經濟の一時期を劃するに過ぎぬものなのでは無からうかといふことは、充分研究すべき餘地の存する所である。

要するに、カッセルは、限界價値の理論に於けるが如き詭辯的議論を避ける目的を以て、極端なる抽象を重ねて此に貨幣經濟の社會を想定したものであることだけは明である。

價值論の煩瑣に對する之と同様な嫌惡的態度はデイーツェルに於て一層明瞭に表れて居る。即ちフォイクトがカッセルの價值學說無用論に反對して、カッセルに在つては、欲望の重要性といふことが「可成り繼母的」な取扱を受けて居ると抗議したのに對して、デイーツェルはカッセルの態度に賛意を表して次の様に述べて居る。曰く『土地、勞働、資本の如きものが如何なる經濟部門、に差向けらるゝや、換言すれば、如何なる欲望の満足、如何なる財貨の獲得、如何なる使用價値の

獲得に差向けらるゝや、生産者——消費者の有効需要に依存するものである。然も此有効需要の状態や經過に就ては理論は全く之を説明するを得ぬ。其次第如何といふに各個人の「評價」は不規則にして變化常なく、其購買力は景氣と共に絶えず變動するが故である『かるが故に、カッセルが欲望の重要性の概念を「可成り繼母的」に取扱つたことは全く正當なことである』(註一九)。と而して更にゲーテの言葉を引用して曰く『認識の進歩に對する最大の障害は人が「知る價值無きもの又は知ることを得ざるものに就て苦しむことより生ずる。——使用價値の法則に關する苦惱も亦之に屬するものである』(註二〇)』。

註一九 Dietzel: Vom Lehrent der Wertehre, S. 33-34.

註二〇 Dietzel: a. a. O. S. 34.

ワルラス、バレット等の數學派の系統を引いて經濟的平衡論の立場から價值學說無用論を稱へる伊太利の學者、エンリコ・バローネの議論も亦之と同様である。即ち曰く、

『價値なる稱呼は何等正確なる内容を有するもので無く、實際には、交換關係(ragione di scambio)といふ正確な概念或は又即座に價格といふ概念に依つて取代へらるべきものである。若し、價値の原因を問ふ者があるとすれば、それは無意義な質問である。價値に付一つも原因などは無い。價値否な一層適切に言へば價格は經濟的平衡を決定する一切の條件から生ずる。』(註二一)』。

(註二一) Enrico Barone; Grundzüge der Theoretischen Nationalökonomie, übersetzt von H. Staehle, S. 43. 1927.

由是觀之、カッセル其他の價值學說無用論者の或者が價值論を排斥する論理的根據は價值概念の

不明確なる點に存する次第が明瞭に觀取せられる。

カッセルが價值論の代りに貨幣經濟社會に於ける價格論のみを取扱ふ、論理上の最も重要な理由は、先に述べた如く、貨幣無くしては各人の欲望の比較が不可能であるといふことである。此點は、彼の Grundriss einer elementaren Preislehre と題する其論文(註二二)に於て詳細に説かれて居る。之に據れば人は貨幣なる價值尺度を所有することに依つて其欲望の分類を爲し得るのみならず當該欲望の強度の支拂關係を表現することが出来る。加ふるに、貨幣は單に一個人に取つての價值尺度たるに止まらず、交換行爲の行はるゝに當つては、相異なる個人間の欲望を比較する共通の社會的價值尺度と爲り得るのである。所謂の限界效用論者は斯様な共通の尺度無しに欲望の比較評定を行はんとした。けれども何等かの價值尺度を必要とするに至つた結果、一財貨の效用又は重要性に之を求め、而して此重要性なる概念は數學的の大きさとして數字に依つて之を表現し得るものと信じたのである。併し之は虚構であつて、實際上人間の欲望の強度を直接に數字に依つて比較することは不可能である。縱令ひ假りに數量的に表現し得たとしても、それは單なる相對的意義を有するに過ぎぬ。然ればそれが絶對的に決定し得るものであるか否か、若し定められ得るとすれば如何にして定めらるかといふ疑問が此に當然生じて來ねばならぬ。人間の欲望の強度の絶對的の大きさは、單に其の大きさのみでは如何にしても數量的に表現し得るものではない。『従つて種々なる個人の此數字を比較する可能性は全然失はれるであらう。果して然りとすれば各個人の價值評價に對する斯様な認識のみに依つて完全に價格形成論の建設が行はれるか否かは疑はしい次第』と爲るのである(註二三)。

註二二 Cassel: Grundriss einer elementaren Preislehre, Zeitschrift für die gesamte Staatswissenschaft 55 Jahrg. 1899.  
註二三 Cassel: a. a. O. S. 400.

茲ではカッセルの所説を一應述ぶるに止めて之に對する批判は後に譲ることとし、而して吾々は更に彼の價格形成論へ戻らねばならぬ。

さて、上に述べた如く、貨幣經濟社會内に於ては、吾人の需要は總て貨幣を通じて表はされる。其際、貨幣は價值の計算尺度として用ひらるゝのである。従つて一定額の貨幣は各人それゝの欲望の強度を示すものとして考へられねばならぬ。富豪が家犬に與へる爲に十錢で一片の肉を買ふも、貧乏人が自身の生活の爲に同額で同じ肉片を買ふも彼等の欲望の強度は共に等しきものと看做されねばならぬ。富者が寶石の爲に支出する一千圓は貧者が食糧の爲に支拂ふ一圓よりも一千倍の強度を有する欲望として考へられねばならぬのである。

カッセルは斯る現實上の矛盾と考へらるゝ所のものを自ら意識して居り、之に就て一つの假定を設け、且つ同時に之に對する辨明を附加へて居る。而して其假定を爲すに至れる次第を述べて曰く『經濟的原則は満足せらるゝ欲望が總て、満足せられざる欲望よりも一層重要であることを要求する。……交換經濟は此目的(經濟的原則の要求の遂行)の爲にあらゆる欲望の重要性に對する共通の尺度を使用する。交換經濟は均一なる品質を有する財貨に對しては總て單一の代價を定め、而して此代價の支拂を欲望満足の條件と爲す場合に於て此に此重要性の大小測定の標準を見るものである。此事は結局其時々々の代價を支拂ふ所の欲望が同じ代價を支拂はざる欲望よりも一層重要なものと

して觀られるといふことに歸する。交換經濟は即ち當該欲望の満足の爲に提供さる、貨幣額に從つて各種の欲望の重要性を測定するものである』(註二四)と。

註二四 Cassel; Theoretische Sozialökonomie, S. 72-73.

然らば斯様な假定から生ずる現實上の矛盾に就ては、カッセルは如何に辨明するのであるか。曰く『……併し、饑餓に瀕せる人の麵包に對する欲望は、畜犬を養ふ爲の麵包に對する富者の欲望よりも遙に重要なものである。従つて前者の欲望よりも後者の欲望を先に満たす所の社會は其社會の有する手段に就て合理的に經濟を行ふものではないといふ抗議が直に生じて來る。けれども、此抗議は富者が其貨幣を用ひて爲す所の非常識なる用途に對して差向けらるものであつて、其限りに於ては、……均一なる價格形成に向けらるべきもので無く、或は又かゝる抗議は現在の所得分配の批判として解さるべきものである』(註二五)と。

註二五 Cassel; a. a. O. S. 72.

以上が價值論を排除して價格論を組立てる爲にカッセルの要した假定である。

交換經濟社會に經濟行爲を營む所の各經濟主體は、其欲望の強度と數量とを表現するに一定の貨幣額を以てする。而して此貨幣額に依りて表はされたる價值評定が即ち價格である。此價格は如何にして成立するかといへば、いふまでもなく需要と供給との關係に依る。拂底の原則に從つて、人の需要は財貨の存在量の限度に制限されねばならぬ。人の需要に對する制限は、其欲望の満足の爲に一定の價格が支拂はれねばならぬといふことを意味する。而してカッセルは價格形成の説明を

ば既成財貨と根本的生産手段との二つに分けて居る。

先づ既成財の價格形成を説明する爲に、一定期間に於ける一定量の財貨の存在が假定せられる。而して更に説明を簡單にする爲に各經濟單位が其欲望満足の爲に當該期間に支出する貨幣總額を一定せるものと看做す。此前提の下にカッセルの經濟的原則に從つて、一定の均一價格が成立する。(：此價格形成の詳細なる説明に就ては、嘗て三田學界雜誌第二十五卷第四號に論述したから此には省略する。)斯くてカッセルは既成財の價格形成を説明して次に生産手段の價格形成論に移るのであるが、今此既成財即ち第一次財の存在量に關する假定を取去れば、その存在量は之が生産の爲に費されたる生産財(即ち第二次の財)の存在量に制限されたるものに相違ない。第二次の財貨は更に第三次の生産財、第三次の生産財は更に第四次の生産財の存在量にといふ具合に、それ／＼高次の生産財の量に依つて制限せられるのである。吾々は斯の如く順次溯つて行くと最後には所謂根本的生産手段 (elementaren Produktionsmittel) —— それ自體生産に依つて増加することの出來ぬ生産手段——に到達する。此生産手段は拂底の原則の支配の下に在る。存在量の限定せられて居る生産手段は既成財の場合と同様の價格形成を爲すものである。畢竟價格は需要と供給の合致する所に定まる。生産手段に對する需要を定めるものは既成財に對する需要である。既成財の需要は間接に生産財の需要を定めるのである。

併しカッセルは單に言葉のみに依る價格形成の説明に満足しては居らない。更に一步を進めて價格形成のメカニズムを數學上の方程式に依つて説明する。けれども、其根本に於て、既成財に對する

需要と生産手段の數量とが價格形成の要素であるといふことには變りはない。唯、カッセルに據れば、此説明は價格形成に就て論争多き因果關係の性質を明にすると同時に更に他方に於ては後に論述する所の貨幣論の本質的な問題、即ち價格形成論の決定性の程度を明にするものなのである。今此にカッセルの平衡價格形成の方程式を述べることは簡單の爲に之を避けて(註二六)直に此方程式より生ずる結論を述べやう。

(註二六) カッセルの方程式に就ては嘗て永田清氏が本誌第二十三卷第十號に説いて居る、參照を乞ふ。

『吾々が吾々の方程式より引出し得る最初の根本的利益は、之に依つて價格形成論に於ける因果の關係の眞の性質を明瞭にし得ることである。……價格論の現實上の決定的要素は吾々の方程式に於ける與へられたる要素である。此要素は三種のものより爲る。第一は價格に對する需要の依存關係を表す所の函數形式、第二は技術的意味に於ける生産費用を示す所の技術的係數、而して第三は一定量を假定せる根本的生産財の供給量即ち之である。第一のものは價格形成の主觀的要素、第二及び第三は共に其の客觀的要素を包含して居る。此等の要素は價格形成の全過程の最後の基礎を示すものである。』(註二七)

註二七 Cassel; Grundgedanken der Theoretischen Ökonomie, S. 54-55.

即ちカッセルに依れば、價格の決定原因は、生産手段の量といふ客觀的要素と價格に對する需要の依存關係といふ主觀的要素の二つに分析される。蓋し、技術上の生産費用を示す所の所謂技術的係數は、一定時に於ては一定せるものと假定して差支へないものであるからである。故に『供給

の方面に於ける客觀的要素か或は又需要の方面に於ける主觀的要素か、何れかに重要な意義を與へる所の純客觀的價值論或は純主觀的價值論などは不可能事である。』(註二八)『此等の價值論の間の論争は、文獻に於ては測り知れざる程の巨大な部分を占めて居るが、何れも皆無益の勞苦である』(註二九)のである。

註二八 Cassel; a. a. O. S. 54.

註二九 Cassel; Sozialökonomie; S. 122.

以上に依つて吾人はカッセルの價格形成論の大體の輪廓を説き終つた氏の價格論が果して價值學說無き價格論として完全なものであるか何うかを検討するのが吾々の次に爲すべき仕事である。

### 三

アルフレッド、アモンはカッセルの價格形成のメカニズムを評して次の如き意味のことを言つて居る。即ち、カッセルの方程式が『價格形成の眞の性質を表示するものであり、且つ又價格形成過程は之以上に簡単な方法を以て正確に之を表現することは出来ぬ』(註三〇)といふカッセル自身の自負は何人も首肯する所であるが、併し此方程式は單に價格と需要との間に一定の函數的關係が存することを明示して居るのみであつて此關係の特殊の性質に就ては何等説明する所が無い。換言すれば『カッセルは需要と供給並に價格の間には一定の函數方程式が成立すると言つて居るが、此函數又は方程式の形式又は構造 (Form oder Gestalt) に就ては何等言及する所が無い』(註三一)氏は斯る方程式が依つて以て樹立せらるゝ所の原則を説明して居らぬ。彼は斯くくゝの方程式が存在せねば

ならぬ、又は存在するといふことを言ひ且つ示して居るが其方程式の根據に就ては何も言つて居らぬ。

註三〇 Cassel; Sozialökonomie, S. 121-122.

註三一 A. Arnorn; Cassels System der theoretischen Nationalökonomie, S. 41. Archiv für Sozialwissenschaft und sozial-politik, Bd. 51, 1924

筆者はアモンの此説に全然賛意を表するものである。カッセル自身も亦、價格決定の主觀的方面の原因として、『需要が價格に依存することを示す所の方程式の係數』(註三二)又は『需要函數が生産財の價格に依存する其様式、即ち生産財に對する需要の性質を明にする所の此函數の形式』(註三三)を擧示して居るのは明に見受けらるゝ所である。然るに吾人はカッセルが需要の此性質に就て説明する所の章句を全く見出し得ぬのである。否、氏は斯様な説明をば全然無用と考へて居つたかの觀がある。即ち氏は均一價格の成立と共に需要と供給の一致すべことを説き、次いで需要の伸縮性に就て説明を加へたる後に述べて曰く『上記の所言よりして次のことが推論される、即ち——今茲に問題と爲る範圍内に於ては、(既成財貨に關する限りに於ては——筆者註)、價格形成論の解決の爲には、吾々は唯、茲に觀察せらるゝ所の財貨の價格が一定するや否や直に此等の財貨一つ／＼に對する需要が決定すると假定するだけで充分である。吾々は價格形成論の爲に更に之以上に需要を分析することを要せぬ。一定の價格状態の場合に於ける需要の範圍は、數量的な、純數學的な形式を備へ、此形式に於て直接に經濟學に依つて基礎として利用し得らるゝ所の一つの明白なる事實である』

(註三四)と。而して更に之を以て限界效用理論を排斥する論據と爲し、之に續けて曰く『此事實の背後に存する所の心理的現象は、之に關する知識が需要に對する價格の影響を正當に判斷する上に寄與する限りに於てのみ理論經濟學に取つて明に興味ある事柄である。……併し斯様な研究は明に本來の經濟學の領域外に在るものである』(註三五)と。

註三二、註三三 Cassel; a. a. O. S. 122, v. S. 123.

註三四、註三五 Cassel; a. a. O. S. 18.

由是觀之、カッセルは「需要の性質」を以て價格決定の主觀的原因と認めつゝも、敢て之に説明を加へることをしなかつたのである。即ち氏は之を以て一つの明白なる事實と考へ、之を説明することは經濟學の領域外に在ると考へたのである。併し吾人を以て之を觀ればカッセルが需要の性質に説明を加へなかつたことは、氏の價值論排斥より生ずる當然の結論であると同時に氏の價格論に取つて致命的な缺點であると信ずる。

アモンは曰く、『aとbとの關係を説明する爲には、唯單に、吾々がaはbに、或はbはaに或方法に於て依存して居るといふこと、即ち一方は他方の函數であるといふことを知る許りでなく、更に如何なる方法に於て一方が他方に依存するか、換言すれば此函數の様式又は構造を知ることが必要である。……具體的に言へば、吾々の場合に於ては、吾々は、需要函數が價格に依存する様式即ち此函數の形式……即ち需要の性質に就て何等か知らんことを欲するのである。之に就てカッセルは吾々に全く何物も告げて居らぬ。即ち氏は此點に關して吾々に何物をも説明して居らぬ。氏の價格

論は、人が價格論より要求し、又要求せねばならぬ所のものを告げて居らぬ(註三六)と。而してアモンは此に於て揚言して曰く「カッセルに依つて、甚だしく誤解せられ、且つ又甚だしく無情に取扱はれたる限界效用理論は之に反して、實に此要求を果たすもの、或は少なくとも之を果さんとするものである」(註三七)と。

註三六、註三七 Annon; Archiv für Sozialwissenschaft, Bd. 51, S. 42.

然らばカッセルが與へられたる明白なる事實として之以上更に説明を要しないものと考へた所の「需要」は限界效用理論に依つて如何に説明せらるゝか。此問題に答へることはカッセルの價格論の不備を一層明瞭ならしむるに役立つであらう。吾々はベーム・バヴェルクに據つて次に之が解答を述べやう。

「世人は、財貨の價格が需要と供給の關係に依つて支配されると説く。けれども、此命題は、需要並に供給なる言葉の中に、唯、單に供給されたる財貨と欲求されたる財貨の數量とを包含するのみならず、更に賣手並に買手それらの側に於て作用する所の決定原因をも包括する一種の綜合概念と解する限りに於て正常なものである。併し世人が此命題に就て、何も深く考ふる所なく、此等の決定原因の性質に就ても、將た又其影響の様式に就ても全く了解する所が無いとするならば、此命題は單に其のみでは、一つの題目、一つの標語に過ぎぬ。決して一つの法則ではない。」(註三八) ベームの此言葉はカッセルの價格論に取つて手痛い警句であるに相違ない。ベームに據れば、「價格の高さは單に供給され、欲求される所の財貨の數量に依存する許りでなく、更に尙ほ之が提供され、

且つ欲求される其強度 (Intensität) にも依存するものである。」(註三九) 需要の強度とは買はんとする願望の激しさを指すのでなく、更に必要な場合には高い價格をも支拂はんとする覺悟を言ふのであつて、此兩者の異なつて居ることは明である。營養不良なる小供の爲に魚肉を必要とする労働者の妻は、同時に市場へ行く富裕な婦人よりも魚肉に對して遙に激しい願望を持つに相違ない。けれども労働者の妻に在つては、現金の不足の爲に買はんとする其願望の激しさも、高い價格を支拂はんとする覺悟に轉換することは出来ぬ。従つて貴婦人の需要の方が一層強きものと解されることに爲るのである(註四〇)。斯様に解せられる所の需要の強度は更に二つの事情の協力を依つて決定される。其一つは需要者に取つての當該物品の價值の大きさで、他の一つは需要者に取つての價格財の價值の大きさである。ベームが斯くの如く需要に就て分析せることは、供給に就ても同様に當嵌る。従つて所謂の需要供給の法則は、ベームに據つて次の如き價格決定の原因に分解される。即ち需要の側より見れば、(一)物品に向けられたる欲求の量、(二)買手に取つての當該物品の主觀的價值の大きさ、(三)買手に取つての代價物品の主觀的價值の大きさであり、供給の側より見れば、(四)賣りに出さるゝ物品の數量、(五)賣手に取つての當該物品の主觀的價值の大きさ、(六)賣手に取つての代價物品の主觀的價值の大きさである(註四一)。

註三八 Böhm Bawerk; Grundzüge der Theorie des Wirtschaftlichen Güterwertes, in Jahrbücher für Nationalökonomie, S.

524

註三九 Böhm Bawerk; a. a. O. S. 526.

第二十五卷 (一三九五) 價值學說無用論と限界效用理論

(註四〇) S. Böhm Bawerk; a. a. O. S. 527.

(註四一) Böhm Bawerk; a. a. O. S. 514.

カッセルの價格論に對するアモンの批評も大體ペームの所言を承認するものゝ如くである。即ちアモンは所謂「需要」には二つの意義があると説く。其一是通例一般に解せらるゝが如く、將た又カッセルが通例解するが如く、「一定の價格状態の下に於て購買若しくは欲求せらるゝ所の財貨の數量、即ち需要量であり、他の一は欲求其物若しくは此欲求の経過即ち價值評定に依存する所の一定數量の需要である。』最初の意味に於ける需要は、一定の價格状態の下に在つては、一定せるものであり、其實體は簡單に、確認し得る事實であるが、併し、それは説明せられて初て一定さるゝものであつて、其説明は第二の意味に於ける需要、即ち主觀的價值評定に溯ることに依つて爲され得るものである(註四三)。アモンは、斯く述べたる後にカッセルが「需要の性質」を以て一度び價格決定の原因と爲したるに拘らず、之を單なる需要量と混同せる矛盾を指摘して居る。

註四三 Amonn; a. a. O. S. 46.

此「需要の性質」を明にするものは、アモンの説けるが如く、所謂「限界效用の理論」である。氏は、其著「國民厚生學」に於て述べて曰く、「カッセルの方程式は供給と需要とに依つて、如何に價格が決定されるかを吾々に示して居る。……併し吾々は經濟學の見地からして、更に、需要は何處より生ずるか而してそれは根本的な經濟的事實と如何なる關係に立つものであるかと問ふことが出来る。茲に於て吾々は主觀的價值評定並に效用に到達するのである(註四三)と。

註四四 Amonn, Grundzüge der Volkswirtschaftslehre I Bd. S. 173.

以上の所述に依つて、吾人は、カッセルの價格學說が價值論なくしては不完全なものである次第を指摘し得たと信ずる。吾々は次に限界效用理論に對する氏の態度を觀察しやう。

## 三

ワイスの言ふ所に據れば、限界效用學說に對するカッセルの議論は、一部分は其教義に對する不完全又は不注意なる觀察に基づき、又一部分は斯說に對する誤解に基づくものであるといふ(註四四)。筆者は大體に於て此意見に大體賛意を惜まぬものである。

註四四 F. X. Weiss; Hand B. VIII Bd. art Wert, S. 1013.

カッセルが價值論を排斥する爲に、價值の評定を貨幣に依つて表現せしめんと試み、而して其結果として相等しき金額は、相等しき欲望の強度を表現するものであるといふ現實と矛盾せる虚構に陥らざるを得ざるに至つた次第は前述の通りである。併し、此虚構を設けたのは價值論を無用なものと考へたが爲め許りでなく、之を設けなければ價格形成を説明することが出来ぬと考へたが爲めであることも亦曩に述べた通りである。繰返して言へば、理論經濟學の爲には種々なる個人の欲望の強度を測定することが必要であるが、此測定は直接に各種の欲望を比較することに依つて之を行ふことは出来ぬ。蓋し、一財貨に對する、相異なる個人の欲望の比較は、其間に何等か共通の標準を求めて之に参照するのなれば、實行不可能だからであるといふ。然らばカッセルは何に依つて欲望の強度を測定するかと言へば、それには貨幣を用ひるのである。此に於てか前述の如き不合理

な假定が生れて來たのである。其結果としてカッセルは又欲望の強度の測定が價格形成の爲に必要であること知りつゝも尙ほ且需要をば一つの數量的觀念と解しそれ以上に之を分析することは不必要であると主張しなければならぬ破目に陥つたのである。即ちカッセルはベーム・バヴェルク及びヴィーザーの所説を参照しつゝ之を攻撃して曰く『人々は實に H. H. 等々の數を以て效用を表現し得る。而して此等の數は先づ第一に相對的な意義を有するものに相違ないであらう。併し此等の數が絶對的に定められるものであるか何うか、又如何にして定めらるゝのであるかは疑問でなければならぬ云々』(註四五)云。

註四五 Cassel; Grundriss einer elementaren Preislehre, S. 400.

今效用の測定に關してカッセルが限界效用學說に對して下した非難の點を要約すれば次の如くである。曰く同一個人の種々なる欲望の直接の比較並に測定も、將た又相異なる個人間の欲望の直接比較並に測定も共に不可能である。之を行ふ爲には一つの共通の標準單位が必要であるのに、然るに限界效用論者は之を樹立して居らぬし又樹立することは出來ぬといふのである云々。

欲望の可測性に關して限界效用學說に對して非難を浴せるものは獨りカッセルのみに止まらぬ。例へばシュルウイン、ノイマン、レキシス、シャーリンク、ウエスターガルド(註四六)等の學者は何れも皆之を難するものである。

註四六 Schellwien; Die Arbeit und ihr Recht, Berlin 1882, S. 198 cit. nach Böhm Bawerk; Positive Theorie des Kapitals

I Bd. S. 247. Neumann in Schönbergs Handbuch II. Aufl. I. S. 159 ff. cit. nach Böhm Bawerk; Ibid. Lexis;

im HWB. I. Aufl. Sup. Bd. cit. nach B. Bawerk; ibid. Schelling; Jahrbücher für Nationalökonomie und Statistik, III. Folge. 16. 27. Westergaard; Indledning til Studiet of Nationaløkonomien, cit. nach Jahrbüches für Nationalökonomie IV. Folge 27 Bd. S. 19.

例へばウエスターガルドは曰く『使用價值は、主觀的概念として全然個人的なものである。各個人的なものである。各個人は何れも、之に對して獨特の態度獨特の見解を持つて居る。或一人が一本の木材に付する價值は他の一人が之に對して付する所の價值とは全く相違し得るものである。然も單に之れ許りではない。同一人に取つても時を異にするに連れて、同一の財貨が全く異なつた價值を持つことがあるであらう』(註四七)云。

註四七 Westergaard; a. a. O. S. 10-11.

ノイマンは曰く『余は、或一つの對象が他の對象よりも四分の一倍丈け餘計に美しいとか六分の一倍丈け餘計に愛らしいとか優美であるとかいふことは出來ぬ。…其場々で問題と爲る所の感情欲望興味等の總體は何としても一つの單位の上に引戻すことは出來ぬ。従つて又之を尺度に照合することは出來ない』(註四八)云。

註四八 Neumann; Schönbergs Handbuch II. Aufl. I. S. 159. zit. nach B. Bawerk.

限界效用理論の根本觀念に賛成する所のデイーツェルも、亦主觀的評價の大きさが不正確なものであるといふ點に於ては該理論に非難を加へて居る。『即ち氏の說に據れば再生産し得る財貨に在つては、價值の大きさは、限界效用といふ不確實不安定なる價值評準に依るよりも、寧ろ遙に正確で而し

て簡単な再生産費用に依つて決定せられるといふのである(註四九)。

註四九 S. Dietzel: Jahrbücher für Nationalökonomie und Statistik usw. 3 Folge Bd. III die Klassisch Wertheorie und die Theorie von Grenznutzen.

シャールリンクは必ずしもディーツェルの再生産費説に賛成するものでは無いが、效用の數量的計算の不可能なことに就ては同様に非難して居る。曰く『人は當然此要素(價格形成の要素——筆者註)の爲にも將た又其上に築き上げらるゝ所の評價の爲にも假定せる任意の數字を設けることが出来る。人は個々の主體が個々の交換財に對し一定の價值を認めることから出發し、此等の任意に選定せる大さよりして勝手に一定の結果を算定することが出来る。併しながら問題は、果して前提の出發點が正しいか否かといふ點に在る。何となれば若し其出發點が正しくなければ最も正確に算定せられたる其結果も誤と爲らねばならぬからである。而して曩に述べた如く、個々の主體は一定の瞬間に於て其所有する財貨及び所有せんと努力する財貨をば如何なる順列に並べる可さかを知るものであるといふことを確證することが出来たとしても、其評價が當該瞬間に於て如何なる結果を生ずるかといふことを爾餘の主體も亦知ることが出来ると思ふのは大なる誤りである。價值の主觀的性質の解釋が、此經濟の核心に對して、それは一つの心理的科學(Seelenwissenschaft)であるといふ事實を確立したことは正しく斯る解釋の重要な意義の存する所である。——而して、心理的運動は決して數字的表現に依つて現はすことの出来るものではない』(註五〇)。

註五〇 Scharling: Jahrbücher für Nationalökonomie III Folge. Bd. 27. S. 19.

欲望(又は效用)の可測性に關して限界效用學派に投ぜらるゝ攻撃は、斯くの如く價值學說無用論の立場を取るカッセルや、生産費説を辯護するディーツェル其他の學者に依つて一齊に發せらるゝ所であるが併し此攻撃は此等の立場からするもの許りでは無い。マルクス主義を遵奉せる代表的理論家ブハリンに依つても、將た又價格平衡學説を唱導するローザンヌ學派の領袖パレードに依つても同様に非難が發せられて居る。ブハリンは此點に就て『オースリア學派は此に至つて、今日未だ克復するに至らず、將來も亦克復せぬであらう所の頗る大なる困難に遭遇する』(註五一)といひ、ベム・バヴェルクに就て之を批評して居る。

註五一 N. Bucharin: Die politische Ökonomie des Rentners, II auf. S. 82.

パレードは、價值評定又は效用が測定不可能なるの故を以て、經濟的平衡を決定する方程式の中に之を取入れることは出来ぬと主張し、限界效用理論を排斥して居る(註五二)。

註五二 S. HWB. VII. Bb. S. 1013, und Pareto: Manuale di economia politica 1906.

斯の如く各方面より一樣に限界效用理論に對して發せらるゝ非難に向つて該效用學派は如何に答へて居るか。此答辯を明にすることは、確に價值論に關する紛争を解決するの一助と爲るであらう。人間の欲望が測定し得るか否かといふ問題は、之を分析すれば、單なる欲望の相對的比較といふことゝ、その絶對的強度の測定といふことゝの二つに分けることが出来る。それから又欲望の比較又は測定が同一人に就て言はるゝ場合と多數人間に就て言はるゝ場合とに分けることも出来るのである。

各人が自己の種々なる欲望の重要性を比較し得ることは自明の事柄である。若しも各自が自己の欲望を相互比較し得ぬものとすれば、最少の犠牲を以て最大の効果を齎らんとするの原則、即ち吾人の經濟的行爲の準則は到底實現され得べきものでは無い。吾々の日常の經濟的行動は欲望の比較し得ることを證明して餘りある事實である。

故に問題は欲望の大きさが數量的に決定し得る可きものであるや否や、相異なる人々の間の欲望の比較が可能であるか否か、更に又此等の測定と比較が限界價値の理論の爲に必要であるか否かといふことに歸着する次第である。然り而して、此點に於て、カッセルに答へたウィクセルの辯明は正に其儘此問題の解答と爲り得る。曰く『吾々の種々なる欲望の強度の比較、即ち各種欲望直接の比較は、若し同一個人に就て言ふ場合には常に可能である許りでなく恐らく、日常生活に於て常に行はれて居ることである。……相異なる人々、又は異なつた事情の下にある同一人の場合に就て言ふならば事態は確に之と相違する。他人同志の間の欲望の強度の直接比較は當然不可能である』(註五三)と。然も此事は價格形成論に何等の影響あるものではない。蓋し相異なる人々の間の欲望の強度の比較は價格形成論の爲には不必要だからである。又其比較は縱令ヒカッセルの貨幣經濟の假定を以てしても不可能である。何となれば貨幣其物が既に各個人に取つてそれ／＼に異なつた主觀的價値を持つものであるからである。かるが故にこそカッセルは同一の貨幣額は「同一の強度の欲望を表す」といふ實際に背馳せる虚構を爲さねばならなかつたのである。所謂る交易經濟社會の下に於ける價格形成を説明する爲には、相異なる個人に取つての同一財の效用は相互之を比較す

る必要はない。唯、同一個人に取つて、一定財貨と其代價財との相對的重要性が問題と爲るのみである。而して此比較は又吾々の日常經驗して居る自明な事柄なのである。

註五三 Knut Wicksell; Zur Verteidigung der Grenznutzenlehre, im Zeitschrift für die gesamte Staatswissenschaft, S. 579, Jahrg. 57, 1900.

其處で更に問題は同一人の各種の欲望は量的に定め得るか何うか、又之が價格形成問題の爲に必要であるか何うかといふことに爲る。

ベーム、ベウエルクは欲望の測定又は測定に類することが實行し得るものと考へて居る様である。即ち氏の所説に據れば人々は實際に之を行つて居るもので、吾々は實際の必要から之を行はねばならぬのであるといふ。例へば或物品を購入するに際して三〇グレンならば購入を欲せぬが二五グレンならば買入れるといふことがあるが、斯様な行動の根本には、當該財貨の購入に依つて其人の受ける享樂は、一グレンに依つて受くる享樂よりも二十五倍以上の大きさを有するけれども三十倍を越えるものではないといふ判断が存在して居るのである。『心理的に反省を爲すものは自身の經驗より斯様な例を容易に造り出すことが出来るであらう』(註五四)と。然れども此推斷は事實一つの問題であらう。吾人はノイマンの共に、或財貨が他の或財貨よりも三分の一倍丈け餘計に美しいとか二分の一倍丈け餘計に愛らしいなどといふことは到底實際に想像し得られぬと信ずるものである。

註五四 Böhm-Bawerk, a. a. O. S. 250-251.

要するに價値の大きさに並に種々なる價値の正確なる比較に關するベームの所説は實際上さういふ風

に行はれて居るのであるから可能なことに相違ないといふ論法の如くに觀取せられる。即ち氏は欲望の數量的比較の可能をば單に事實に訴へて左様確信するより外に説明の道を見出し得ない様である(註五五)。例へば勞働量の方が限界效用よりも一層正確なる價值尺度を爲すものであるといふディーツェルの説に反對して曰く、「縱令ひ余がX(或限界效用——筆者註)の大きさが何の位であるかに就て知らぬとしても或は又之を定めんとする努力を拂はぬとしても、猶ほ $\frac{1}{2}x$ が $x$ の二倍であり $\frac{1}{2}x$ は $x$ の二倍丈け多いといふこと丈けは確である。」(註五六)と。惟ふにベームは效用の斯様な數量的觀察を自明の理の如く考へて居つたのであらう。然も氏は限界效用の評定が數的な客觀的精確さを有するもので無いことをば、限界效用論者自ら自覺して居ることであると明言して居る。氏の説に據れば、併しそれは現實を反映するものなのである。實際に於て誤つて行はれる效用の計算は誤れる價值評定の説明に、而して正しき計算は正しき價值評定の説明に役立つのである。ベームは正しき計算は正しき價值評定の説明に、而して誤れる計算は誤れる價值評定の説明にとは言つて居るが、不正確なる計算は不正確なる價值評定の説明に役立つとは言つて居らぬ(註五七)。蓋し價值評定が縱令ひ不正確なものであるとしても、價值評定が實際に行はれるに際しては、兎に角それが一定數量を表すものと觀るより外ないからであらう。

吾々は此問題の解決を、エミール・レーデラーの所謂る、計量及び客觀化(Quantifizierung u. Objektivierung)に求めやうと思ふ(註五八)。

註五五 Böhn Bawerk; Wert Kosten und Grenznutzen, S. 345. im gesammelte Schriften. 1924.

註五六 S. Böhm Bawerk; a. a. O. S. 349.

註五七 E. Lederer; Aufriß der ökonomischen Theorie, 1931.

惟ふに、吾人の主觀的評價が畢竟單なる感情である以上其一つが他の一つに比べて何倍の大きさを有するかといふが如き表現は到底不可能である。併し吾々は之を比較することは出来る。單に二つの財貨の效用に就て許りでなく、多數の效用に就ても之を段階付けることが出来るであらう。吾々は欲望の強度を豫め數量的に比較表現し得ぬといふことが、數量的觀念たる價格の形成を説明する爲に障害に爲るとは考へぬ。例へば或色の濃さは比較し得るけれども其濃度を直接に比較し得ても、之を測定することは出来ぬけれども吾々は其顔料が一定量の溶液に溶解さるゝ分量に依つて其濃度を客觀的に言ひ表すことが出来る。之に依つて吾人は一は他の二倍の濃さを持つと言ふも決して其濃度そのものを比較して斯くの如く客觀的に言ふのでは無く、唯、顔料の分量に據りてさう言ひ得るに過ぎぬ。吾人は經驗に依つて幾何の顔料を一定量の溶液に溶かせば或濃度を表すかを知り得るのである。

之と同様に或財貨に對する吾々の欲望の強度も又他の或財貨との關係に依つて初て之を客觀的に表現し得るのである。換言すれば、吾々の欲望は「交換」行爲といふことに依つて客觀化せらるゝのである。ベームは一定數量の財貨を交換する爲には、豫め之に對する主觀的評價が數量的に定まつて居なければならぬと考へた。然も氏は之が證明を事實に訴へるのみであつた。吾人を以て觀れば、寧ろ或財と或財とが交換せらるゝことに依つて其交換と同時に價值評價の客觀化が行はるゝの

であると説明した方がよいと思ふ。換言すれば價值評定は交換行為に先立つて豫め計量せらるゝことを要せぬのである。例へば或人が漠然と麵包よりも肉を得んことを欲して居る場合に在つても、之を現實に評價するに當つては、一片の麵包に對して一斤の牛肉とか或は二斤の魚肉とか、必ず其評價は數量的觀念を伴ふものである。而して交換を媒介する財貨として社會一般に貨幣が使用される場合には欲望の強度の客觀化と同時に其計量の問題は頗る容易に實行せられる。吾人は牛肉に對して一圓を拂ひバンに對して五十錢を支拂ふとしても尙ほ前者に對する欲望が後者に比較して二倍であるといふ場合にそれは決して欲望の強度其物に就て言つて居るので無く、唯、客觀化せられたる欲望を比較することに依つてのみ斯く言ふに過ぎないのである。レーデラーの言へる如く『一般的に認められたる交換手段としての貨幣制度……は、主觀的價值評定の基礎の上に立つ所の經濟に對して一つの數量的形式を與へるものである。各個人の個々の價值評定は其性質上全く比較すべからざるものであつて、……それが主觀的意識の根元體から解放せられ、具體的なる財貨と交換關係を結ぶに至らざる限り、經濟の世界に於て有効と爲り得ぬのである。此交換關係は貨幣に於て、最も頻繁且つ最も容易に表現せられる。既に直接の財貨交換に於て客觀化せられたる主觀的價值評定は、今や亦之に依つて計量せらるゝに至るのである。それは最早や明に意識行動ではない。否、それは確に依然一つの意識行動には相違ないが、併し此主觀的價值評定はそれ以上に一つの數的表現にまで壓縮せられ單純化せられたのである。此轉換は、交易に取つて、從つて又各經濟主體が互に取引し合ふ所の人間に取つても主要なことであるのである』(註五九)と。

註五九

Emile Lehrer; a. O. S. 219.

ベームの誤りは欲望が測定し得べきものでなければならぬと斷定した其出發點にある。問題はシェーンフェルドの言ふが如く欲望は測定し得べきや否やに在るのでは無く、欲望の測定が吾人の經濟行為の爲に必要なりや否やに在るのである(註六〇)。而して之に對する答は當然「吾々は實際にそれを測定して居らぬし、又測定を必要とせぬ」といふことであらう。

註六〇

S. Leo Schönfeld; Grenznutzen und Wirtschaftsforschung I. und II. Teil S. 14.

メンガー・ベーム及びウィーザー等、限界效用理論の創立者とも認めらる可き人々は欲望の測定の可能を主張して居るが、筆者は之を否定することを以て同理論に取つて重大なる修正とは考へぬ(註六一)。此修正に依つても、價值評定は依然として價格形成の基礎を爲すものと認め得るのである。

註六一

波多野鼎氏著「價值學說史」第二卷に依れば、斯る修正は「メンガー・ウィーザー及びボエム・バヴェルクの理論の曲歪即ちその根本的修正を意味せずにかかぬであらうと言つて居る。(同書一九二頁)」

以上に依つて吾々はカッセル其他の諸學者の説ける欲望の可測性に關する議論が決して限界效用學派に取つて致命的なもので無いことを明にし得たと信ずる。吾々はカッセルの價值學說無用論其物こそ寧ろ無用であると言ふことが出来るであらう。吾々は次に不必要なる價值學說無用論を説けるカッセルが如何に限界效用理論を曲解したかを明にし、氏の價格形成論の爲には寧ろ限界效用理論の必要なる次第を論じて論文を終へやうと思ふ。

## 四

吾々は先づ限界效用理論に對するカッセルの解釋を知らねばならぬ。カッセルの言を直接に引用すれば『限界效用理論は需要の心理をば抽象的な數學的形式に強制的に組立てたものである。一個の欲望満足の「效用」は數學的に評價し得るものと看做されて居る……』(註六二)と。斯様な抗議が決して限界效用理論を正當に解釋せるものでないことは、上述せる所に依つて明白であらう。或は客觀的價值論又は主觀的價值論なるものは、價格をば客觀的原因又は主觀的原因のみに溯らんとする理論の意味であるとするれば無意味である』(註六三)と。言ひ或は又『所謂る限界效用は……價格と等しく、問題中の未知數たるべきものであるから、價格説明の根據として限界效用を引證することは明に無意味である』(註六四)と言ふ。即ち氏の所説に依れば限界效用に依つて價格が定まるのではなく、其反對に限界效用が價格に依つて定まるのである(註六五)。

註六一 Cassel; Sozialökonomie, S. 68.

註六三 Cassel; a. a. O. S. 122.

註六四 Cassel; a. a. O. S. 123.

註六五 S. Cassel; a. a. O. S. 70.

限界效用理論は、決して、カッセルの言ふ様に價格又は價值の決定原因を主觀的原因のみに歸するものではない。同理論は一方に於ては人間の欲望といふ主觀的事實と他方に於ては該欲望に比して稀少なる財貨の存在量といふ客觀的事實との此二つより出發する、財貨の價值は主觀的並に

客觀的の此兩事實より生ずる所の限界效用に依つて定まるとされるのである。故に限界效用なる概念は其中に主觀的要素と客觀的要素とを包含するものである。而して任意に再生産し得る財貨に在つては、其存在量は一定せるものと見る譯に行かぬので、茲に生産費用が價值決定に對して重大なる影響を及ぼすことを認むるのである。併し限界效用理論に據れば生産費用は價值決定に對して單に中間的原因たるに過ぎぬ。生産費用を構成するものは根本的生產手段の價值であるが、其價值は畢竟するに該手段の存在量と、之に依つて生産されたる生産物を通じて現はさるゝ所の、生産手段に對する需要とに依つて決定せらるゝのである。此點は、生産費説を主張する人々との間に激しい論争の存する所であるが、今カッセルのみに就て之を觀れば、氏は生産費用に對して、全く限界效用論者と同様な役割を認めて居る。即ち氏は自己の費用概念をマーシャルのそれと比較して曰く『マーシャルの見解に依つて表はさるゝ所の費用は、本質上一つの個人的給付一つの努力、賠償されねばならぬ所の一つの犠牲である……之に反し余に在つては費用の概念は價格形成過程の結果としての純客觀的な概念である。此費用概念の爲には唯、生産手段の拂底といふことだけが根本的な前提である。價格は此拂底の上に依存することをのみ要するのであつて、決して當該生産手段の供給の條件と解すべきものではない』(註六六)と。

註六六 Cassel; a. a. O. S. 76.

之に依つて觀れば、カッセルの費用概念は結局生産手段の稀少性と人間の欲望とに求められることが明である。而して其概念は限界效用理論を以て言ひ表はせば、正に生産手段の限界效用といふ

ことに歸するものである。

然らば價格決定の原因に就ても將た又生産手段の價格に就ても、斯の如く限界效用論者と同じ説明の途を辿れるカッセルが『限界效用は價格に依つて定まる』と主張する論據は何處に在るのであるか。

吾人の觀る所では其論據は同氏の價格衡平論に在るのである。『即ち氏の說に據れば、財貨の評價といふことは、一定の價格状態 (Preislage) を基として初て考へられることなのである。何を消費すべきやは、あらゆる財貨に就て一定の平衡價格が存して居つて初て定め得べきことなのである。爾餘の財貨の價格が異なる以上、或一財に對する評價も亦異なつて來なければならぬ。従つて單獨に一つの財貨に就てのみ價值評定を行ふことは出來ぬといふのである。限界效用理論と價格平衡論との關係に關する詳細なる研究は他日に譲るが、併し此處でも唯次のことは言へるであらう。曰くカッセルの價格平衡論は限界效用理論に取つて必ずしも致命的なるものではないと。蓋し、一財貨に對する需要は爾餘一切の財貨の價格の函數であるといふことは、決して當該財貨の最も直接なる決定原因としての限界效用、即ち其存在量と之に對する需要との關係を否定するものではないからである。此二つの價格決定原因は、一つ／＼の財貨に就て觀るならば依然として最も直接の價格決定原因たるの實を失ふものではないからである。『爾餘の一切の財貨の價格状態』は固より或一定財貨の價格決定に影響を及ぼすに相違ないが、それは限界效用よりも一層間接的な決定原因たるに過ぎない。此事實は限界效用論者自らのよく知了せる所であつて、ベトナムも亦『若し人が所謂に價值

法則に依つて、一つの事情を價值の根據として指摘せんとするならば、それは、唯、人が、財貨の價值に影響を及す殆ど果てしなき因果の連鎖の中から最後の影響を與へる所に特に目立ちたる中間の鎖を抜き出すのであるといふ意味を持つに過ぎぬ』(註六七)と言ひ、斯くの如き中間の鎖を限界效用に求めて居るのである。換言すれば限界效用に於て『吾々は——趣味、流行、生産條件其他——間接に價值に影響するあらゆる複雑なる事情の作用をば最後に一點に集積せしむるのである。……併し若し吾々が尙一步溯るならば吾々は最早や一つ／＼でなく二つの價值決定原因——需要と存在量——を擧げねばならぬ。而して猶ほ更に溯るならば吾々は恐らく十、二十或は數百の相協力する價值決定原因を見るであらう』(註六八)と。

註六七 Böhm Bawerk; Gesammelte Schriften, S. 355.

註六八 Böhm Bawerk; a. a. O. S. 355.

かるが故にこそカッセル自身も亦價格決定の原因として、二つの主觀的原因並に客觀的原因を擧げて居るのであらう。

尙ほ最後に附加すべきことは、カッセルの價格形式の説明方法である。氏は價格の社會經濟的職分として、價格が拂底の原則に依つて需要を制限すべきことを言つて居る。之に依ると一財貨に對する需要は價格に依つて存在量と一致せしめらるゝに至る。換言すれば價格が如何なる範圍まで需要を滿すべきかを決定する、即ち限界需要は價格に依つて定まるのであると。併し此論證はカッセル獨特の説明方法に基くものであらう。需要と供給とが一致する所に價格は定まるといふ見地から

説明を施せば限界効用が價格を決定するといふ論理に進んで行くであらう。

由是觀之、カッセルの價格形成論は殆ど全く限界效用理論に依る價格の説明と同一の論法を取るものといふことが出来る。唯、氏は限界效用理論に對し自家の誤解に基いて之を非難し之を排斥して結局全く虚構な假設の上に立つ價格論を展開したのである。若し氏の價格論をして根據あるもの爲らしめんと欲するならば、吾人は當然之に價值論を補充せねばならぬ。若し價值論を補充するにすれば、それが限界效用理論以外のものであり得ぬことは、氏の經濟學の出發點に關する前提より觀るも將た又氏の價格形成論の歸結より觀るも共に明白に推察せらるゝ所であらう。

九 月 號

# 三田文學

貝殼追放(喰へない文學).....	水上瀧太郎
ロシヤを見よ(社會時評).....	原 實
二三の問題(文藝時評).....	本松 幹 夫
水谷八重子と初夜權(演劇時評).....	八 住 利 雄
ドリユ・ロシエルの近作.....	大田 咲 太 郎
平松氏に答へて.....	庄 野 誠 一
今井久雄死す.....	諏 訪 三 郎
今井久雄君のこと.....	和 木 清 三 郎
誰も愛してくれない(ローラン).....	日 野 巖 譯
アラビイシエームス・デヨイス.....	淺 尾 早 苗 譯
年齢の顔(小説).....	庄 野 誠 一
よそえ(戯曲).....	宇 野 信 夫
按摩その他(詩).....	鹽 川 秀 次 郎
花東の行動(戯曲).....	牛 島 榮 二
池のほとり(小説).....	倉 島 竹 三 郎

發賣所 丸之內 友善堂 定價 五拾錢